

## 第1章 事前調査の概要

### 1-1 要請の背景

グアテマラは、美しく豊かな自然と、マヤ族先住民文化（考古学的遺跡や織物など）に代表される観光資源に恵まれている。観光業はグアテマラ経済のなかで重要な位置を占めつつあり、コーヒー輸出に次ぎ第2の外貨収入源となるとともに、雇用の促進にも貢献している。1996年12月末に最終和平協定が締結され、観光庁は現在観光振興に努めているところである。しかしながら、将来における十分な成果が期待されるためには、インフラ整備、環境保全などを含む中長期の観光開発計画の策定が必要であると認識している。こうした状況を背景として、1998年、グアテマラ政府は、本件分野で優れた実績をもつ我が国に全国観光開発調査の要請をしてきた。これに対し、事前調査団を派遣し、要請内容の確認、S/Wの協議などを行うものである。

### 1-2 調査団の構成

| No. | 氏 名   | 担当分野                     | 所 属                         |
|-----|-------|--------------------------|-----------------------------|
| 1   | 進藤 敦丸 | 総括／観光行政                  | 東洋大学短期大学観光学科 教授             |
| 2   | 岩田 賢  | 観光振興／観光開発計画              | 運輸省運輸政策局観光部企画課企画係長          |
| 3   | 成川 和也 | 調査企画                     | 国際協力事業団社会開発調査部<br>社会開発調査第一課 |
| 4   | 柴田 護  | 環境保全／環境調査                | 都市文化総合研究所                   |
| 5   | 星野 莞治 | 観光資源評価／観光関連インフラ<br>／市場調査 | ソーワコンサルタント株式会社              |
| 6   | 吉川 敦子 | 通訳                       | 日本国際協力センター 研修監理部研修監理員       |

### 1-3 調査目的

- ①要請の背景、内容の確認
- ②本格調査の実施方針及び実施協議（S/W）、協議録（M/M）の協議、署名・交換
- ③先方受入体制の確認
- ④本格調査実施に必要な情報収集

## 1-4 調査行程

| 月日   | 曜日 | 調 査 行 程                                                                      |
|------|----|------------------------------------------------------------------------------|
| 8/16 | 水  | (成川) 17:10 サン・ホセ発(LR640)→18:45 グアテマラ・シティ着                                    |
| 8/17 | 木  | (進藤団長ほか4名) 14:45 東京発(JL046)→12:40 ダラス着<br>14:50 ダラス発(TA441)→17:10 グアテマラ・シティ着 |
| 8/18 | 金  | JICA事務所打合せ、大使館表敬<br>副大統領表敬、外務省・経企庁表敬、グアテマラ観光庁(INGUAT)表敬                      |
| 8/19 | 土  | S/W説明・協議、アンティグア視察                                                            |
| 8/20 | 日  | サンタエレナへ移動、現地踏査(セイバル)                                                         |
| 8/21 | 月  | 現地踏査(アグアテカ、ヤシャ)                                                              |
| 8/22 | 火  | 現地踏査(ティカル) グアテマラ・シティへ移動                                                      |
| 8/23 | 水  | S/W、M/M協議                                                                    |
| 8/24 | 木  | S/W、M/M協議                                                                    |
| 8/25 | 金  | S/W、M/M署名 (岩田)グアテマラ・シティ→日本(帰国)                                               |
| 8/26 | 土  | グアテマラ・シティ→パナハッチェル→ケツツェルテナンゴへ移動<br>現地踏査(アティトラン湖周辺)                            |
| 8/27 | 日  | 現地踏査(ケツツェルテナンゴ周辺) ケツツェルテナンゴ→グアテマラ・シティ                                        |
| 8/28 | 月  | 大使館、JICA事務所帰国報告 (吉川)グアテマラ・シティ→日本(帰国)                                         |
| 8/29 | 火  | (進藤、成川) グアテマラ・シティ→日本(帰国)                                                     |
| 8/30 | 水  | 柴田団員、星野団員は引き続き資料収集等調査(9/3にグアテマラ→日本)                                          |

## 1-5 主な面談者とカウンターパート機関

### 日本大使館

|                |       |
|----------------|-------|
| Akira Urabe    | 大使    |
| Jiro Shibasaki | 参事官   |
| Kiyoshi Ishii  | 一等書記官 |

### JICA駐在員事務所

|                          |                                |
|--------------------------|--------------------------------|
| Takashi Ishizuka         | 所長                             |
| Kazuo Tada               | Coordinador                    |
| Grenda Carol Martinez. F | Asesora en Cooperacion Tecnica |
| Ayumi Sakamoto           | Secretaria                     |

### グアテマラ

|                      |      |
|----------------------|------|
| Juan Francisco Reyes | 副大統領 |
|----------------------|------|

## Instituto Guatemalteco de Turismo ( I N G U A T ) →カウンターパート機関

|                                     |                                                                     |
|-------------------------------------|---------------------------------------------------------------------|
| Lic. Juan Francisco Callejas Várgas | Director                                                            |
| Ing. Anner Baudilio Mejía Santos    | Asesor de Dirección Coordinador General,<br>División Administrativa |
| Lic. Jaime Osorio                   | Jefe Asesoría Jurídico                                              |
| Arq. Lorena de Paredes              | Jefe de la División de Desarrollo del Producto                      |
| Licda. Johana Pinto                 | Jefe, División de Mercadeo                                          |
| Ing. Luis Alberto Leal              | Jefe, Departamento de Fomento                                       |
| Arq. Adela Arreaga                  | Arquitecta, Jefe del Departamento de Planeación                     |
| Srita. Julissa M. Rivera Carrillo   | Jefe Departamento Operación y Comercialización                      |
| Licda. Lucrecia Gordillo            | Jefe de Proyectos Específicos, Jefe de Estudios y Proyectos         |
| Sr. Victor Velózquez                | Subjefe Departamento de Fomento                                     |
| Lic. Jose Antonio Parada            | Asesor y Coordinador Programa Nacional Asistencia al Turista        |

## 外務省

|                    |                        |
|--------------------|------------------------|
| Marta Aida Argueta | アジア、アフリカ、オセアニア局次長 ほか7名 |
|--------------------|------------------------|

## 経済企画庁 ( S E G E P L A N )

|                     |                  |
|---------------------|------------------|
| Juan Antonio Flores | 国際協力局次長          |
| Kazuhiro Fuse       | J I C A 専門家 ほか4名 |

## ケツェルテナンゴ

|                           |                                                       |
|---------------------------|-------------------------------------------------------|
| Juan José Mónde           | Coodinador de Area Quetzaltenango Proyecto Probosques |
| Emsnuel Alejandro Vasquez | Director del Porgue Regional Monicipal Zumil ほか数名     |

## 1-6 団長所感

グアテマラ全国観光開発調査の事前調査団は、8月17日(木)から9月3日(日)まで、「常春の国」といわれ、マヤの遺跡とインディヘナの伝統文化に代表される豊富な観光資源に恵まれた同国に滞在した。

到着した翌日、8月18日(金)、レージェス副大統領、カジェハス観光庁長官、アルゲータ外務省アジア・アフリカ・オセアニア局次長、浦辺日本大使、石塚JICA/JOCV事務所長などを表敬訪問し、有意義な意見交換を行うことができた。副大統領からは表敬訪問後、持参した心ばかりのお土産に対する礼状を頂き、大変光栄に思うとともに副大統領ご自身が観光産業の振興

に大きな期待を寄せておられることを実感した。浦辺大使からは、グアテマラの観光魅力、日本人観光誘致、観光産業の現状などについて説明を受け、本格調査の重要性を認識した。

カウンターパートであるカジェハス観光長官とは、数日間にわたって協議を行ったあと、8月25日(金)、ほぼ原案どおりの内容でS/Wの署名を行うことができた。協議の場において同長官から、今後の観光政策、観光庁の組織と活動、観光関係法規、観光産業の将来などについての説明を受け、同国において今後、観光産業の振興が経済発展の鍵を握っていることを認識した。

現地踏査では、アンティグア、ペテン、アティトラン、ケツェルテナンゴなどに行き、魅力ある観光資源に直接触れることができた。特にアンティグアの古い町並み、ティカルの遺跡、アティトラン湖周辺の集落が印象に残った。また、調査団の滞在期間中、観光に関する有益な数多くの資料を収集することができた。

日本出発前、本件要請があった当時(1998年)の政権が今年交替したところから、現政権の本件に対する対応を懸念していたが、現政権においても観光産業の振興は重要政策として取り上げられており、また、カジェハス長官から、政権が交替しても観光振興の重要性は変わらないとする法律案を現在国会に提出しており、今年中には成立する見通しであるとの説明を受け、出発前の不安は払拭されたといえる。また、現政権は、本年5月、日本人旅行者の不幸な事件が起きたにもかかわらず、日本政府が本調査団を派遣したことに対して感謝しており、我々一行の滞在期間中、万が一のことが起きないようにパトカーの護衛をつけるなど、絶えず気を使ってくれた。

このように今回の事前調査団が成功裏に終えることができたのは、観光庁、日本大使館、JICA/JOCV事務所など多くの皆様のお陰によるものである。深く感謝申し上げます。

最後に、本調査団が初期の目的を達成することができたのは、成川団員、岩田団員、柴田団員、星野団員、そして吉川団員の活動によるところが大であったことを申し添える。

## 1-7 協議概要及び合意事項

- \* 日本政府とグアテマラ政府の間で締結されている「技術協力協定」の前文を載せてほしいという要望がINGATよりあり、全文をAPPENDIX-1とすることで合意した。
- \* 「VII. UNDERTAKING OF THE GOVERNMENT OF GUATEMALA 3.(3)」において、suitable office space with necessary equipment in Guatemala Cityとあるが、オフィスなどについて提供することは問題ないが、INGATが新たなものを買う場合に所要の手続きを踏む必要がある。この趣旨を追加してほしいとの要望があり、「suitable office space with necessary equipment in Guatemala City, if it's necessary to buy any equipment, it will be according to the Guatemala law.」と追加修正することで合意した。
- \* また、そのほかの合意事項については以下のとおり。(別添M/M参照)
  - ・ 本格調査の開始時期については、2000年12月、または2001年1月に開始することを予定す

ることとした。

- ・ ステアリングコミッティについては、I N G U A Tを議長として以下の機関により構成されることとし、本格調査の開始までにI N G U A Tが調整を行いその設置がなされることが合意された。なお、必要に応じてそのほか関係機関が追加されることも合意された。
  - Ministerio de Cultura y Deportes
  - Secretarí a Ejecutiva de Presidencia
  - Secretarí a General de Planificación(S E G E P L A N)
  - Secretarí a de Medio Ambiente
  - Cámara de Turismo(CAMTUR)
  - Universidad del Valle de Guatemala
- ・ I N G U A Tは本格調査開始までに本調査に対するリーダーと各々の分野のカウンターパートを決定しておくことが合意された。なお、そのカウンターパートは本調査を通じて、J I C A本格調査団と意見交換を行い、各々のレポートに対して協議を行う役目を担うものとする。
- ・ 調査範囲については、全国マスタープランによってグアテマラ全土を対象とする。また、地域マスタープランを策定することとなるが、その対象地域としては、最終的には全国マスタープランの策定を通じて決定されるものの、ペテン全域、コバンとその周辺地域、ケツツェルテナンゴとその周辺地域を想定することが合意された。全国マスタープラン策定時には、この点に留意する必要がある。
- ・ 特に、ペテンについてはティカルを中心として多くの遺跡が存在し、発展のポテンシャルが最も高い。このため、全国マスタープランの策定に並行してペテン地域の地域マスタープランを策定することが肝要であることが合意された。なお、留意すべき点として、ティカルはペテン地域の中心となるものの、計画の重点はティカルの開発を発展させることなく、現在開発が進んでいないほかの遺跡存在地域の開発及び入り込み増加促進に対する計画である。ティカルを目玉とし、ペテン全域に存在する遺跡群を観光客が訪れることが期待されるものである。
- ・ 技術移転セミナーについて、本格調査の中間段階と最終段階で行うことが合意された。
- ・ カウンターパート研修について、I N G U A T側から要望があり、事前調査団はその実現が図ることができるよう、J I C A本部へ伝えることとした。
- ・ ファイナルレポートについては、「公開」とすること、またC D－Rによって提出されることが合意された。

## 第2章 グアテマラの現況

### 2-1 グアテマラの概要

グアテマラは、面積10万8,889km<sup>2</sup>と北海道と四国を合わせたよりやや大きく、人口1,051万人(1997年国立統計院)で首都をグアテマラ・シティ(人口約100万人)にしている。人種構成は、インディオ50%、白人8%、混血(ラディーノ)42%となっており、ほかの中米諸国に比べ原住民の比率が高くなっている。

また、1523年スペインによる征服、1821年独立宣言、1823年中米諸州連合結成、1838年グアテマラ共和国成立、そして1986年民政移管といった歴史をたどった。1996年12月末に最終和平協定が締結され、36年続いた中米最後の内戦に終止符が打たれたところである。

政体は共和制で、現在ポルティージョ大統領が政権に就いている(2000年1月就任、任期は2004年1月14日まで)。大統領の任期は4年で、いかなる場合でも大統領の再選を禁止されている。大統領は1名の副大統領とともに国民投票によって選出され、国務大臣及び各大臣を任命する。

気候は、「常春の地」といわれるほど、首都をはじめとした中央高原地帯は一年を通じて平均気温は18度となっているが、海岸地帯は熱帯性となっており、多様性に富んでいる。また、雨期が5～10月、乾期が11～4月となっている。

主要観光地は、ジャングルのなかに忽然と現れるマヤ文明最大の都市遺跡「ティカル」、1979年にユネスコ世界遺産に登録されたスペイン植民地時代の面影を残す「アンティグア」、マヤ先住民の生活が色濃く残る「チチカステナンゴ」、世界一美しい火山湖として知られる「アティトラン湖」など、世界でも名だたる観光資源を有している。

1996年12月末に最終和平協定が締結され、36年間続いた中米最後の内戦に終止符が打たれ、政治目的のためのテロ活動はほぼ終息した。しかし、武器などが一般に出回っており、一般的な治安状況は改善の兆しが見えず、殺人、誘拐、自動車強盗などが引き続き発生し、依然として危険な状況といえる。観光客が多く訪れる首都グアテマラ・シティのバスターミナル周辺など、一部の地域の治安は依然として危険であるとともに、アンティグア、ケツツェルテナンゴなどでも被害が増加しており、観光開発の障害となっている。

こうしたなか、2000年4月29日、ウエウエテナンゴ県トドス・サントス・クチュウマタン市(首都グアテマラ・シティの北西約300km)において、マヤ文明と先住民の観光をめぐる日本旅行会社主催の「秘境ツアー」に参加中の日本人観光客(添乗員を含む19人)が、現地住民の群衆によって暴行、投石などを加えられ、日本人男性1名と現地人運転手が死亡するという事件が発生したところであり、今後の我が国からの観光客誘致が危惧されるところである。

経済は、コーヒー、バナナなどの農業中心であり、輸出用作物は大規模プランテーションで栽

培されている。1999年のG N Pは180億8700万米ドル、1人当たりのG N Pは1631米ドルとなっており、また、貧困率は53.3%、識字率は69%となっており、先住民を中心としてその改善の必要がある。

こうしたなか観光産業はグアテマラ経済のなかで重要な位置を占め、1997年よりコーヒーに次ぐ第2の外貨収入源(1996年2億3800万ドル、1997年3億1500万ドル、1998年3億9400万ドル)となっている。

我が国との関係は伝統的に良好であり、特に経済協力の分野では我が国の援助は米国を押さえ1995年以降二国間援助の最大供与国となっている(1997年主要援助国：日本(49.8億)、米国(35億)、独(31.7億)、スペイン(23.9億)、オランダ16.5億))。また、青年海外協力隊数は平成12年4月現在計106名と世界一の受入国となっている。

## 2-2 経済・社会・国家開発計画における観光の概観

### 2-2-1 国家経済社会開発計画における観光産業の位置づけ

アルフォンソ・ポルティージョ政権の発足と同時に、2000年から2004年までの「第4次国家経済社会開発計画」が策定された。そのなかで「社会政策」において、教育、健康、住宅、多様な文化の交流、雇用、女性の地位向上、弱者の保護、農牧業、環境、交通・通信、エネルギーが開発重点項目としてあげられている。特に、コーヒー、砂糖、バナナ、のような世界的市場価格の変動の影響を受けやすい第1次産品が主要輸出品目となっている植民地経済構造を引きずっているグアテマラにおいては、現在コーヒーに次ぐ第2番目の外貨収入を上げている観光については、今後国家が支援していくべき産業との位置づけがなされており、ポルティージョ大統領自身の発案により、「観光開発委員会」と大統領府の機関であるI N G U A Tの手になる「国家観光開発戦略」が策定され、これがポルティージョ政権の観光開発政策となっている。

この観光開発戦略は、「観光セクターの長期的視野に立ったバランスのとれた総合的な発展」を目標としており、国内の多様な人種の協力による観光開発への参加を呼びかけ、中小産業の振興、文化の保護と環境保全、国家の生産活動を通して国家計画における「社会政策」の実現を呼びかけている。具体的な戦略としては、

- 1) 公的機関の開発と強化
- 2) 公的各機関の間のコーディネーションの強化
- 3) 既存の観光地と今後開発すべき観光地の開発との統合
- 4) 観光情報システムの構築
- 5) 教育と観光
- 6) マーケティングの強化

が述べられており、そのための方策として、

- ① 民間プロジェクトを促進するための支援策とそのための法整備
- ② I N G U A T の技術向上のための人材開発の強化
- ③ 学校教育のなかに観光を取り入れ、専門技術の普及と向上を図る
- ④ 地方における観光産業振興、観光の地方化による地方文化の振興と経済効果を図る
- ⑤ 環境保全に基づいた開発

が提案されている。

## 2-2-2 観光の産業構造と国家経済への貢献

グアテマラの観光は、古代マヤ文明、スペインの植民地時代の遺産、先住民の生活文化などの文化と、熱帯雨林ジャングルや動植物、火山湖などの自然が主な観光資源となっており、1998年には63万6,000人がグアテマラを訪れた。訪問観光客の国籍は、北米・メキシコが39.3%、中米34.6%、ヨーロッパ17.8%、そのほか8.3%で、北米と中米からの観光客が圧倒的に多く、全体の70%を超えている。I N G U A T の統計では、すべての入国者を観光客として扱っているが、入国目的では、観光が44%、ビジネス20%で全体の67%が男性である。年齢別では30-40歳台が34%を占めている。国籍別入り込み観光客数をANNEX-1に示す。

観光の目的は、遺跡・文化観光が50%、自然観光が28%、そのほかが友人・家族訪問、避寒などで、遺跡・文化観光と自然観光はグアテマラの重要な観光プロダクトとなっていることが分かる。また、観光客の訪問観光地は、アンティグアが67%、アテトゥラン湖・パナハツェル45%、グアテマラ市とティカル、チチカステナンゴは30%台である。このことは、アンティグアとアテトゥラン湖・パナハツェルは首都からのアクセスが容易なこともあって、多くの観光客を集めている一方、ユネスコの歴史遺産になっているティカルへは、航空機によるアクセスが主で、便数も少ないことから、主に外国人観光客の主要な目的地となっており、グアテマラ人は外国人の3分の1程度で、短期のビジネス客や近隣諸国からの訪問者がティカルに足を延ばす機会が少ないためと思われる。また、一番経済的効果の期待できるゲートウェイとしてのグアテマラ市では、30%しか市内観光をしていないが、その理由は首都の観光的魅力が少ないことによっている。さらに、チチカステナンゴへの訪問者は、ほとんどが、市の開かれる木曜と日曜のみに集中しているせいであるものと思われる。

ホテルは1999年12月現在、全国で1万5,400室がI N G U A T に登録されているが、そのうち、星を持つホテルが9,872室あって、5スターホテルは1,468室、4スターホテルは1,010室がグアテマラ市に集中しており、そのほかは、アンティグアに5スターホテルが295室、4スターホテルは90室あって、これらの2都市で、全国の5スターホテルの96.4%、4スターホテルの67.4%を占めている。

ツアーオペレーターは、すべてI N G U A T の事業許可を受けて登録することになっている。



現在、ツアーオペレーターは約180社あって、そのほとんどがグアテマラ市とアンティグアに集中している。そのため、地方における観光収入は食事とお土産ぐらいで、観光収益は低い。

ツアーオペレーターは業界の利益のために政府に対するロビー活動を行うことを目的にASOPTOURと称する協会をつくって活動を始めたが、まだ、会員会社は15社のみで、協会としての具体的な活動はまだあまり行っていないような印象を受けた。このほか、ホテル、お土産業界など、すべての観光関連産業全体の業界組織としてCAMUTOURが組織されている。

観光ガイドは、INGUATの免許により営業することができることになっており、現在、約400名が登録されている。ガイドは、その個人の能力と語学力に応じて、①特定の観光地のみでのガイドの免許、②地域にある複数の観光地においてガイドができる免許、③全国の観光地においてガイドができる免許の3種類があり、そのすべてはINGUATの本部で試験が行われている。グアテマラのガイドは、中南米とスペインの観光客を対象とした、スペイン語のみの者も多く、必ずしも英語を話せるとは限らない。日本語を話すガイドは現在のところはいない。

観光による経済効果は、1998年の観光による外貨収入が3億9,400万ドルに達した。これはその年のコーヒーの輸出、12億9,700万ドルより少ないが、砂糖の3億5,100万ドルを超えて第2位を保っている。また、観光客の平均滞在日数は9日で、1日当たりの支出額は平均約100\$、その内訳は、ホテルに25\$、食事に23\$、お土産に18\$、買い物に18\$、そのほか16\$という構成になっており、航空券を除いた観光客の1人当たりの支出は平均で900\$から1,000\$である。これらの直接的な観光収入のほかに、国内産業に及ぼした総合的な経済効果は30億ドル以上と推定されており、これは1998年のGDP、189億9,200万ドルの約16%を占めていることになり、観光産業の国内経済への貢献度が大きいことが分かる。

輸出産業としてのグアテマラの特産品である手工芸品は1999年には1,280万ドルの輸出品目となった。それら手工芸品の多くは地方における農民のホーム・インダストリーによる地元産品である。なかでも、独特な織物は伝統的にグアテマラの代表的な手工芸品で、国内の農民の約60%が関連している一大産業製品となっており、そのほか薬草などとともに、EUやユネスコによる品質向上と販売への技術協力が行われている。そのため、観光地におけるそれらの販売は数少ない地元への直接的観光収入源となっており、地方における重要な経済活動としての位置を占めている。現在、文化省のなかに「民芸品製作活動支援委員会」が発足し、製作者支援のための社会保障、教育、商業化への資金援助などに関する法整備が検討中である。

### 2-2-3 観光の社会的インパクト

グアテマラにおける観光開発と観光活動は、これまで、主として国内及び近隣周辺国のヨーロッパ系住民と外国人を対象として行われてきており、先住民であるマヤ系住民は観光産業に

においては、主に、その文化的資源として、また、供給側の従業者としてのみの参加がなされてきたといって良い。そのため、先住民社会における観光客受入れの体制づくりや教育はなされておらず、外国人観光客は主として民芸品販売の対象にしかになっておらず、自らの観光産業への参加意識はほとんどないといって良い。そのため、過日のようなうわさに煽動された外国人観光客に対する暴行事件や、貧困と経済的格差に起因する犯罪が発生する要因となっている。

特に、伝統的社会規範と自己生産活動による経済活動のなかに生きている先住民にとって、観光客のもたらす近代的慣習や貨幣経済、現代の法律と社会習慣などとのずれによる伝統社会に生きる人々へのインパクトは大きい。特に、内戦終結後、まだ日が浅く、武器と力ではなく、法律による支配の概念が十分浸透しきれていない状況下にあって、観光客への社会的違和感や反発が犯罪に結びつく素地はある。そのため、観光開発においては、先住民の観光産業への参加とともに、観光客受入れのための体制づくりに関する住民の総意形成も平行して考慮されねばならない。

## 2-3 自然状況及び環境

国土の南半分は中米の最高峰のタフムルコ (Tajumulco : 4,220m) など 33 の火山を頂くメキシコから太平洋岸沿いにシエラ・マドレ (Sierra Madre) 山脈などが走る山岳地帯である。一方、ユカタン半島に入る北半分は比較的平坦な森林地帯である。

また、北部にはカリブ海、南部には太平洋に面した海岸地帯も存在する国である。

県別に森林面積を見てみると、ティカル国立公園など 150 万 ha の中米最大の自然保護地域の指定がある、ペテン県が約 213 万 ha で最も多く、全体の 43% を占めている。

南部の山岳地帯の森林面積が少ないのは、農業地域 (ジャガイモ、トウモロコシ、タマネギなど) 拡大や燃料確保 (マキ) のための森林伐採が原因となっており、環境破壊が進んでいる。

主な河川は、北部メキシコ国境沿いに流れメキシコ湾に注ぐウスマシンタ川 (Rio Usumacinta)、グアテマラ最大の湖のイサバル湖 (Lago de Izabal) から流れホンデュラス湾に注ぐドゥルセ川 (Rio Dulce)、南部メキシコ国境沿いに流れメキシコ湾に注ぐスチアテ川 (Rio Suchiate) の 3 河川である。

湖は大小数多くあるが、代表的な湖としては前述したイサバル湖のほかに、北部のマヤ文明遺跡として一大観光地を形成しているティカル (Tikal) に近いペテン・イッツァ湖 (Lago Peten Itza)、そして七色の湖として風光明媚な観光地を形成しているアティトラン湖 (Lago de Atitlan) などがある。しかし、これらの湖においては観光地域の污水や湖畔に居住する地域の生活排水によって水質が汚染されている。

このような地勢をもつグアテマラの気候は海岸地帯の熱帯性気候、中央高原地帯の温帯性気候に大きく分かれる。気象観測は通信・運輸公共事業省に属する INSIVUMEH (地震学、火山

学、気象学、水文学研究所)において全国64箇所の観測所で実施している。主要地域の気象条件をみると、北部のペテン(Peten)は高温多湿の熱帯性気候、ほかの地域は温帯性気候であり、なかでも南部山岳地帯のケツアルテナンゴ(Quetzaltenango)では温度差が大きく、年間の平均気温も低い。降雨量はアルタベラパス(Alta Verapaz)が最も多く年間2,000mmを超える。

**主要地域の気象条件(1995)**

| 地 域              | 気 温(°C) |      |      | 降雨量    | 日照時間  | 湿 度 | 風 速    |
|------------------|---------|------|------|--------|-------|-----|--------|
|                  | 最 大     | 最 小  | 平 均  | (mm)   | (時間)  | (%) | (Km/h) |
| ① Alta Verapaz   | 24.5    | 13   | 17.4 | 2074.9 | 172.5 | 88  | 4.2    |
| ② Guatemala      | 24.5    | 14   | 18.3 | 1196   | 203.6 | 78  | 17.7   |
| ③ Peten          | 31.4    | 20   | 24.8 | 1553.1 | *     | 78  | *      |
| ④ Quetzaltenango | 21.7    | 5.8  | 13.3 | 842.5  | 201.5 | 75  | 7      |
| ⑤ Solola         | 26.2    | 13.5 | 19   | 1011.7 | 179.2 | 79  | *      |

資料：INSIVUMEH

## 第3章 グアテマラ国観光開発の現状と課題

### 3-1 観光行政、政策

観光行政を担当しているのは、グアテマラ観光庁（INGUAT）があり、一部の予算執行には経済企画庁の承認があるものの、大統領府直属として、独立した地位と力を保っている。INGUATの組織としては、マーケティング部、企画部、管理部などがあり、マーケティング部では観光振興、宣伝、市場調査などを、企画部では観光開発のためのマスタープラン作成などを行っている。また、管理部を中心として本案件を担当するものと思われるが、本格調査の実施に当たり確認を有するところである。

INGUATの財源としては、10%のホテル税や30ドルの空港税があり、独立した収入源を有しており財政基盤は安定している。

観光を含めた国家プロジェクトや対外経済援助など外国との窓口は経済企画庁が担当しており、グアテマラ政府内で圧倒的な力を有している。

グアテマラにおいては、農業が一番の産業となっており主要な外貨収入源となっているが、外貨収入は国際市場価格に依存しており、このことがグアテマラ経済を時として不安定にしている。したがって、グアテマラ政府は、近年、安定した外貨獲得源として観光開発に注目しており、インフラ整備、環境保全などに係る中長期的な観光開発計画の策定が必要であると認識しているところである。

1997年には、観光は外貨獲得額が農業に続いて第2位となり、このころより観光産業の重要性が認識されはじめ、現在では観光産業は外貨獲得五大産業の一つとして位置づけられるようになった。1996年の和平合意後は、観光インフラの開発が始まっており、観光産業が国家経済を導く原動力としての役割を果たしている。

観光産業発展に関する政府の政策は以下のとおりである。

- ・ 観光の潜在能力や機会を利用して、国家発展に寄与
- ・ シンプルかつ、フレキシブルな労働環境の形成
- ・ 観光産業に競争性の導入
- ・ 市場の要求への対応
- ・ 持続可能な観光産業発展のための商品開発など支援
- ・ 観光客の満足度の保証
- ・ 国内観光促進にむけた基盤づくり

なお、2000年1月よりポルティージョ大統領が政権に就いているが、INGUATの首脳陣も政権交代に伴い大幅に交替するのが常となっている。

本要請事体は1998年の前アルスー政権時代になされたもので、INGUAT長官をはじめとして主要スタッフは交替しており、その遂行が危惧されたところであるが、今回のS/W協議において現INGUAT長官及びグアテマラ政府高官の強い支持が確認されたところである。しかし、2004年には大統領選挙があり、今後も政権交代の危険性に注意しつつ調査遂行をしていく必要がある。

### 3-2 観光開発計画

ダイナミックかつ計画的な手段で観光産業を振興するため、INGUA「2005年にむけた持続可能な観光開発」を策定している。

このプログラムの重点ポイントは、以下のとおりである。

- ① 多様化かつ充実した観光の提供
- ② 観光インフラとサービス施設と行った観光部門への投資誘導と支援
- ③ プロモーションとマーケティングの強化
- ④ 観光を受入れるコミュニティには労力の提供を求めだけでなく、利益も得られるようなかたちで観光発展の枠組みのなかで組み込み
- ⑤ サービスの向上と人的資源の養成
- ⑥ 文化とエコシステムの保護の推進
- ⑦ 地方プロジェクトを実行するための強力な強化

#### 【構成】

##### I. 概要

##### II. 2005年にむけた持続可能な観光の発展の基本

##### III. 持続可能な観光の発展のガイドライン

##### IV. 包括的政策とその主要目的

(公的機関の活動、資源の利用、商品としての観光開発、マーケティング、観光事業に対する支援)

##### V. 戦略

(商品の開発戦略、市場戦略)

##### VI. 2005年にむけての目標

(経済目標、その他の目標)

##### VII. アクションプラン

(公的機関の活動、資源の利用、商品の開発、マーケティング、観光事業への支援)

本計画は、グアテマラにおける観光の持続的な発展をうたったものとして注目に値するが、その具体的な実行はなされておらず、効力が乏しいものとなっている。

また、グアテマラは、自然や歴史、考古学的な観光震源に恵まれた国であるが、これらの大半は現在もなお未開発の状態にあり、観光を目的とした開発がなされる必要がある。

しかし、一部の重要な観光名所では既に文化や考古学遺産の保護のみならず自然保護に関する問題が生じている。あちこちに散在する遺跡を訪れる観光客の来訪により、必然的に環境の劣化がもたらされているのが現状である。また、多くの観光施設は道路網、電力などのインフラの不備といった問題を抱える。さらに、国際レベルのホテル整備も重要であり、開発と環境保護の均衡が問題となっている。こうした現況から、バランスのとれた国家発展を実現するような観光開発計画が不可欠である。

今回の我が国が行う本格調査にあたっては、この経験を踏まえ、実行性のある計画策定が望まれている。

この本格調査による観光開発計画においては、当初はティカル遺跡などの狭い地域を想定していたが、INGUAT側の要望により、同遺跡を中心とした未開の遺跡も含めた幅広い地域を想定した開発計画の策定による、一部の地域にかたよらない地域住民も含めた全体的な発展をめざすこととなった。

また、計画においては、観光に関する法律策定や改正も含めた実行性のあるものをINGUAT側は求めているとともに、計画策定後の、我が国の資金協力についても期待をしているところである。

### **3-3 観光振興／宣伝**

グアテマラへの観光客は中米、北米及び西欧からが多く、そのため、INGUATは、観光宣伝のため海外事務所をマドリッド、ローマ、パリ、マイアミなどにおいている。

また、国内のティカル遺跡の玄関口フローレスや、空港など外国人観光客の多い地域には現地案内所を構え、観光宣伝を行っている。パンフレットは、INGUATの豊富な収入を反映して、詳細かつレベルの高いものを作成している。スペイン語をはじめとして、英語、ドイツ語、フランス語、イタリア語などのパンフレット、マップを作成しており、また、日本語のパンフレット（概要説明のみ）も存在する。

### **3-4 観光開発と環境保全**

グアテマラは山岳地帯、森林地帯そして海岸地帯に分かれており多くの火山、河川、湖を抱えた自然資源の豊富な国である。また、ペテン(Peten)にあるティカル(Tikal)国立公園、旧首都ア

ンティグア(Antigua)、イサバル(Izabal)にあるキリグア(Quirigua)考古学・遺跡公園の3箇所の世界遺産をもっているなど、数多くの遺跡(37箇所)がある。

現在の国際観光の特性をみても上記世界遺産の観光地域を中心にした遺跡・旧跡めぐり、そして山岳地帯のトレッキング・温泉、コーヒー園めぐりが主体となっている。

したがって、環境保全という観点からみると自然資源や遺跡・旧跡の観光はホテルなど観光施設やアクセス道路などの建設・運用に伴う環境破壊が中心になると思われる。

そこで、保護地域の指定状況を見てみると国立公園、遺跡・旧跡、湖などその多くはスポット的な地域指定になっている。そのことはCONAPにおける保護地域の指定条件の一つに「観光開発の行われた地域は原則、その周辺を保護地域に設定する」としていることでも理解できる。現在保護地域として114の地域が指定されている。今後も少しずつ増加する傾向を示すものと思われる。

将来、観光開発と環境保全の問題を考える際には、保護地域の指定状況を調査すると同時に山岳地帯で多く発生している農業開発や燃料確保による森林伐採、生活排水による河川や湖沼の水質汚濁といった衛生上の問題も含めた環境問題の調査も必要である。また、ペテンではこの30年間でマヤ生活圏が急速に拡大しており、観光地としてのティカル国立公園との共存が問題になっているなど、都市のあり方を踏まえた調査も重要になる。

### 3-5 観光関連インフラ

#### 3-5-1 交通インフラ

##### 1) 空港施設

グアテマラの国際空港はグアテマラ・シティの 아우ローラ空港とペテン州のフローレス空港の2箇所で、そのほか、国内線用空港として、コバン、プエルト・サンホセ、フローレス、チキムラ、プエルト・バリ奥斯など7箇所がある。これらの地方空港はいずれも航空機の安全な運行のためには不十分な規模で、設備も古く計器誘導装置もないために、天候に左右されやすい。

グアテマラ市の 아우ローラ空港は、市の南部4kmの 아우ローラ地区にあって、長さ2,987m、幅60mの滑走路を持つ軍民共用の空港である。空港は1,509mの高地にあり、最近まではKLMのB747-400が週1便発着していた。しかし、滑走路の傾斜率は1.786%あり、ICAOの基準を満たしていない。さらに、タキシング・ウェイは滑走路から70mしか離れておらず、B747とMD11がすれ違うときには主翼の接触が心配されていた。また、

I F R運行に必要な180mはおろか、V F R運行に必要な150mにも満たないため、最大運用便数は、1時間当たり10-11便に制限されており、既に限界を超えている。また、ターミナルビルもゲートは6箇所、時間あたりの運用能力は7機程度で既に限界に達している。

世界的に重要な観光地であるティカルのゲートウェイとしてのフローレス空港は、長さ3,000m、幅45mの滑走路を持ち、大型機の発着も可能であるが、コントロールタワーと誘導装置が古く、改善することが求められている。

アウローラ空港とフローレス空港の改善計画に関しては、1990年にJ I C Aが改善のための開発計画調査を行っており、現在、航空局であるAERONAUTICA CIVIL(民間航空局)は空港の移転ではなく、J I C Aの計画に沿った空港ターミナルの拡張とタクシーウェイの改修を含めた改善を実施することにしており、そのための有償資金協力を我が国に要請すべく準備をはじめている。

## 2) 航空路

グアテマラ・シティのアウローラ空港とフローレス空港には、北米のロスアンゼルス、サンフランシスコ、ヒューストン、ダラス、ニューオルリンズ、マイアミ、隣国のメキシコの、メキシコシティ、カンクン、メリダ、ベリーズのベリーズ・シティ、そのほか周辺国のサン・サルバドル、テグシガルパ、マナグア、サン・ホセ、パナマシティなどとの航空路が開設されており、グアテマラの航空会社グループ・タカは19か国と35の国際空港、66の地方空港との国際路線が開設されている。

グアテマラへの乗り入れ航空会社は、地元中南米のタカ・グループ(Groupo Taca: グアテマラ、エル・サルヴァドル、ホンデュラス、コスタ・リカ、ニカラグア、ペルーの6社のグループ会社で、本部はサン・サルバドル)のほかに、米国のアメリカン、ユナイテッド、コンチネンタル、デルタ、メキシコのメヒカーナと、ヨーロッパからはイベリア、K L Mなどが乗り入れており、今回、タカ・グループはエール・フランスとも共同運航の協定を結んだ。タカ・グループは90%が政府、10%が民間の会社で、保有機はエアバス300が5機、319が2機、320が14機、ボーイング737が18機と、中型機のA T R、ツインオッターやセスナなどの小型機43機で、グアテマラ、サン・サルバドル、サン・ホセ、リマを拠点に、南米のボゴタ、キトー、サンパウロ、ブエノスアイレス、サンチアゴなどまでに路線を延長し、中南米の主要航空会社としての展開を図りつつある。

## 3) 道路

グアテマラ国内の道路総延長は12,037kmで、その種別と内訳は以下の表3-5-1-Bのとおりである。



表 3－5－1－B 道路の種別と延長距離

| 道路の種別         | 総延長距離  | 構成比   |
|---------------|--------|-------|
| パンアメリカン・ハイウェイ | 1,869  | 15.5  |
| 国道            | 2,190  | 18.2  |
| 県道            | 5,943  | 49.4  |
| 地方道           | 2,035  | 16.9  |
| 合 計           | 12,037 | 100.0 |

出典：

上記の表から、舗装が国道に偏重しており、県道地方道の舗装率はまだ低い事が明らかになる。現在の問題は、アスファルト舗装の悪化で、1987年に37.5%であったアスファルト道路の不良部分が、1993年には47.6%と増加し、さらに増えていることがあげられる。この原因として、国家財政の緊縮化による公共事業省における道路維持管理のための予算不足が主な原因が考えられ、そのため、道路の維持管理は不良部分の改善が適切に実施されていない。しかし、地方における砂利舗装の道路は通行する車両が少ないせいか、路面は比較的良好な状態にあった。

特に、陸上輸送量が全体の98%を「閉める」グアテマラにおいて、観光客輸送の安全性と効率性、確実性を確保するための道路整備は観光開発のための整備課題として重要な課題と位置づけられる。グアテマラの道路網と主要な観光地を図3－5－1－Aに示す。

#### 4) バス・タクシー

グアテマラ市においては、バスとタクシーが唯一の公共交通機関であるが、バスは100万人の人口のグアテマラ市に125系統が運行されており、複雑で一般観光客にとっては利用しにくい。これまでにも治安上の問題があったため、観光客は敬遠している。現在、バスは3,200台あって、そのうち、市営バスが800台、私営のバスが2,400台で、なかには車両を1台しか持たずに営業を行っている会社も何社かあることから運行の信頼性が低い乗り物と見なされているためにタクシーが観光客の重要な交通手段となっている。

グアテマラ市のタクシーは、すべて市の交通局からの営業許可を受けねばならないことになっており、その監督官庁はグアテマラ市のEMETRAで、現在までに2,000台が許可を受けて営業を行っている。このうち、1,700台はタクシー溜りで客を待つステーションタクシーで、300台が流しのタクシーである。タクシー運転手の営業許可は毎年更新することになっている。その理由は、以前は素行の悪い運転手や、強盗をする者が居たため、今では運転免許証と同時に素行記録の提出が必要とされ、営業許可のステッカーをフロントガラスに貼って運転することが義務づけられている。また、タクシー会社の車両を運転す

る際にも運転手は営業許可を得たものでないとタクシー運転手として採用してはならないことになっている。それでも、これまでに I N G U A T に寄せられたタクシーへの苦情は料金に関するものがほとんどであるとのことであった。

タクシー料金は現在では交渉により決められている。E M T R A の説明では、以前は一時メーターをつけたが、料金のネゴとダンピングが横行し、結局メーターを使うものが居なくなってしまった結果であるとのことであった。そのため、メーターをつけている車両は少ない。

グアテマラ・シティ周辺、西部地域や高原地帯への長距離バスは、観光オペレーターの所有する観光バスは比較的新しいきれいな車両が使用されているが、一般の長距離路線バスには古い車両が使用されており、2人掛けの座席に3人が座り、乗車率も200%を越える満員の状態で、悪路を走るため、車両のいたみも激しく、時に故障して路肩で修理をしているバスを見かける。グアテマラ・シティからは、アンティグア、ウエウエテナンゴ、ケツェルテナンゴ、チチカステナンゴ、コバン、パナハッチェル、ティカル遺跡、プエルト・バリ奥斯、ラ・メシア、テクン・ウマン、サン・サルバドルなどに長距離バスが運行されている。この長距離バスは外国人旅行者も利用しており、バックパッカー旅行者にとって不可欠な交通手段となっているが平均速度は時速40kmぐらいで、一般の観光客むきではない。

## 5) 鉄道

鉄道はグアテマラ国有鉄道(FERRIVIAS GUATEMALATECAS)により独占的に運行されているが、現在は貨物専用となっており、陸上輸送に閉める割合もわずか2%で、グアテマラ・シティから大西洋側のプエルト・バリ奥斯と太平洋側のサン・ホセ、チャンペリコ、メキシコ国境のテクン・ウマン、エル・サルヴァドル国境までの合計約1,140kmの路線が運行されている。しかし車両も古く、時間も不正確で、現在のままでは効率的な商業輸送には問題があるが、近年、環境的見地から鉄道輸送を見直そうという動きもある。

グアテマラ国鉄、FERROVIASでは、1999年にヨーロッパの鉄道マニア協会との協賛でS Lを利用した観光列車を運行し、非常に良い評判を得たことから、今後は観光列車を定期的に運行することを営業方針として採択した。これは、S Lに40人乗りの1等車と修復した大統領専用車を連結して列車を編成し、大西洋岸のポルト・バリ奥斯港に上陸したヨーロッパ人のクルーズ観光客40名に、途中でジャングルツアーをしたり遺跡を見たり、S Lの撮影会などをしながら約300kmを14時間かけてグアテマラ市までのS Lの旅を提供したもので、その時の乗客から感謝と賞賛の手紙がたくさん届いた。この年末にはさらに大きなグループのツアーが予定されており、そのために、さらにもう2両の客車の修復をすることにしている。このツアーは、国鉄が線路と車両を乗務員付きで1日7,500ドルで貸し

出し、オペレーターが食事、飲み物、サービス要員とイベントを提供して実施されたものである。

#### 6) 水路

水路交通は、現在のところはS I T旅行者のための交通手段として脚光を浴びつつある。特に、ペテン州の中央部のサヤクチェからウスマシタ川にそって点在するマヤ遺跡とジャングルを巡りながらメキシコのチアパスまで下るために利用できる水路交通が運行されているが、現在のところは観光船ではなく、地元住民の生活路線となっている。このツアーは近年良く知られようになり、観光客も増加しつつある。

### 3-5-2 都市インフラ

#### 1) 電気

グアテマラでは電気事業はE T C E E (Empresa de Transporte y Control de Wnergia Electrica del Inde)と称する公社に事業になっており、グアテマラ国内だけでは不足するためにエル・サルヴァドルから電気を買っているが、それでも電力不足は恒常的な問題であり、停電や電圧の変動が著しい、しかし、自家発電装置を備えているホテルは少なく、コンピューターや精密電子機器の使用に障害となっている。地方においては夕方から深夜までのみに時間を限って電力供給を行っているところが多くある。グアテマラの電気は電圧が110V、60Hzで供給されている。

#### 2) 通信

グアテマラの電話は地方への回線が少なく、首都圏及び周辺へのダイヤル直通による通話はまず問題がなくかかるが、地方部においては交換手による通話方式によつて、時間がかかる所がある。公衆電話は首都及び市部ではカード式の公衆電話が設置されているが、地方部ではいまだに古いコイン式の電話機が主で、故障も多く、回線の不足と相まって通信事情は良くない。国際電話は、利用者数が国内に比べて少ないせい、通信状態は良く、24時間全世界にダイヤル通話が可能で、コレクトコール通話も扱っている。

郵便事情は非常に悪く、外国で出版されているガイドブックには常にそのことが述べられているが、原因は時々起こる郵便袋の盗難か郵便システムそのものに問題があるのかは不明である。日本までの郵便も1か月近くかかることも珍しくない。

#### 3) 上下水供給・処理

水道水は公式には飲料水として適切であるということになっており、一般の住民は水道水を飲料水として利用しているが、首都圏では飲料水は市販のミネラルウォーターが多く使用されている。問題は地方における地下水の水質で、アメーバ赤痢やサルモネラ菌による消化器系疾患が発生することがある。

下水はグアテマラ市においては近隣のアマティラン湖に放流して自然処理により処理を行っている。そのため、アマティラン湖は市民の週末のピクニックサイトになっているが、遊泳禁止になっている。地方都市においては今でも地下浸透式によっているところが多く、地下水の汚染、伝染病の発生の原因となることが心配されている。

#### 4) 廃棄物処理

廃棄物処理に関しては、グアテマラ市、アンティグアなどの市制を布いている地域では収集を民間業者に委託している。しかし、機材はドナー国の供与によるものを使用しているため統一はされていない。例えば、グアテマラ市では東京都のごみの収集車が東京都のマークを付けたまま使用されており、アンティグアでは収集要員がトラックと一緒に歩きながらトラックの荷台に投げ上げて集め、その後、スペインから供与された、コンパクターのついた収集車に移し変えている。観光地でもグアテマラ市内でも、全体的にごみはよく収集されており、街の中にごみが捨てられているのはあまり見られなかった。グアテマラ市の中央市場でも通路は清潔に整頓されており、東南アジアのマーケットに見られるような排水や野菜くずが通路にあふれているような不潔さと雑然さはない。

### 3-5-3 社会インフラ

#### 1) 救急体制

プレホスピタル体制としての公共機関の救急車が配置されているが、数が十分でないこともあって、信頼性に問題があると見なされており、多くの救急患者は自家用車又は友人の車を利用して病院の救急部 (Emergencia) に搬送されている。

グアテマラの医療水準は、海外の病院での研修を受けた医師も多くいて、ある程度の水準にあるが、裕福な家庭では、一寸難しい治療が必要とされる場合にはアメリカで治療を受けるものが多い。医療システムはアメリカ式で、医師、薬剤師、検査技師はそれぞれ独立した機関となって分業をしている。地方の医療水準は首都とはかなりの差がある。先住民社会では祈祷師の方がより大きな力をもっており、住民の信頼を得ている。

#### 2) 治安・警察

グアテマラでの観光開発における課題の一つが治安の問題で、国内和平協定締結以後、ゲリラにかわって、内戦時代から残っている武器を持った一般犯罪が増加しており、特に、過日の日本人観光客に対する襲撃事件は、潜在的にあったグアテマラに対する「危険な国」のイメージをさらに強くすることとなった。しかし、これに類似した事件はこれまでも何回かあり、グアテマラ政府は、ここ数年、首都圏及び各観光地における警察官のパトロールを増やすなどして治安の回復に対処して来た。その結果、首都及び観光地での治安は大きく改善したといわれており、現在、その更なる改善をめざして交番システムの導入が検

討され、その正式な設置を議会において検討中である。

しかし、一方では警察力の強化のみでは解決する問題ではなく、内戦時代に定着した「力の支配」の社会観念を、「法の支配」へと変えて行くための、政府と軍及び国民全員に対する教育、同時に、観光産業の地方経済への効果の理解と普及への教育が同時に進められねばならない。

### 3-6 主要観光エリアと観光資源

#### 3-6-1 観光エリアと観光地

グアテマラ政府は観光開発の基本政策として以下の方針を策定している。

- ・ 現在ある国家遺産としての観光資源のインベントリーを作成しその魅力の潜在性の分析と研究を通じて、新たな魅力の発見と開発に努めること。
- ・ 観光商品の持続可能な開発のために、国内の観光資源の開発計画、開発優先順位の選定を行う。
- ・ 観光商品開発に際しては、国際観光市場及び、増大しつつある国内市場も視野にいたれた開発計画を策定する。

以上の開発基本政策により、開発促進を効率的に進めるため、国内の観光地を以下の7エリアに分けてそれぞれの観光資源について開発を進めることとしている。

- 1) 「グアテマラ、現代と植民地時代」：グアテマラ市とアンティグア市周辺地域、首都と周辺にある施設とアンティグア、自然の景観が主な観光資源となっている。
  - ① グアテマラ市にある博物館、近代美術館、市内に残る歴史的モニュメント
  - ② コンベンション施設
  - ③ スペインの植民地時代の町アンティグアの町並みと歴史的建物；町全体がユネスコの歴史遺産に指定されている
  - ④ グアテマラと、アンティグア周辺の自然の景観；活火山、森、農村
  - ⑤ 郊外にあるゴルフ場
- 2) 「インディヘナの生活する高原地域」：マヤ先住民の生活する西部高原地域、現代に生きているマヤ先住民の宗教と生活文化、手工芸品と自然の風景が主要な観光資源となっている。
  - ① チチカステナンゴのインディヘナの生活文化、宗教、周辺の風景
  - ② チチカステナンゴの手工芸品市
  - ③ アティトラン湖・パナハツェルと周辺の風景、インディヘナの伝統的村落、民芸品村、アティトラン湖の水没遺蹟
  - ④ 周辺地域のインディヘナの村落と生活文化

- ⑤ ケッツェルテナンゴのスペイン殖民地時代の遺跡
- ⑥ 温泉；チカバル

### 3) 「マヤ世界での冒険」：ティカルを中心とする北部地域

フローレスを観光のベースとして、既に世界的に名を知られたティカルの遺跡を中心に、ヤクシャ、ナクムなどの多くのマヤ遺跡群をたずねる遺跡観光と、自然保護区に指定された周辺の熱帯雨林とそこに生息する動植物を観察する自然観光が主な観光活動であるが、首都から航空機で1時間、バスで8時間の距離にあり、ここを訪れる客は外国人の観光客とビジネス客の週末観光が圧倒的に多い。近年、さらに北部にウアクサクトム、ミラドール、リオ・アスール、中部に近いのセイバル、ドス・ピラス、アグアテカからウスマシタ河に沿って、メキシコとの国境地帯にはアルタ・デ・サクリフィシオ、ピエドラス・ネグラスをはじめ、メキシコのチアパスからカリブ海までの間に壮大なマヤ遺跡群があることが発見されて、そのいくつかは既にK f W、B I Dなどの支援により発掘調査が開始されており、

- ① ティカルを中心としたマヤの考古学遺跡群：ティカル、ヤクシャ、ナクム
- ② 北部のマヤ遺跡群：リオ・アスール、ミラドール、ウアクサクトム
- ③ ペテン県南部の発掘中のマヤ遺跡群：セイバル、ドス・ピラス、アグアテカ
- ④ メキシコ国境とのウスマシタ河に沿ったマヤ遺跡群：アルタ・サクリフィシオ、ピエドラス・ネグラス
- ⑤ 帯雨林とそこに生息する動植物観察のための自然観光
- ⑥ カヌーツアー、乗馬
- ⑦ キャンプ、釣り、カルダモンのプランテーション見学

### 4) 「様々な魅力を持つカリブ海」：東部カリブ海地域

グアテマラのカリブ海はほかのカリブ海諸国とは異なり多様性を持っていることが特徴とされる。その結果、以下に述べる観光活動を可能にしている。

- ① 自然観察とクルージング：イサバル湖
- ② 遊覧観光：イサバル湖
- ③ スペイン以前の時代と植民地時代の遺跡：キリグアのマヤ遺跡、スペイン時代のサン・フェリッペ城
- ④ 湿原とマングローブ林
- ⑤ 太陽と砂浜

### 5) 「自然のパラダイス」：コバンを中心とした中部高原地域

コバンを中心とした湖の地域はまだあまり開発の手が入れられていない地域で、エコ・ツアーを中心とした自然観光が期待されている地域で、ホテルも小規模ながら質の良いも

のが整備されている。

- ① 人為的に手が加えられていない原生林のエコシステム
- ② 土地の工芸品製作者とのコンタクト
- ③ 洞窟や鍾乳洞への探検
- ④ バードウォッチング：ケツアルの生息地として知られている
- ⑤ 自然のなかでのアドベンチャーツアー：ラフティング、カヌー
- ⑥ コーヒー・プランテーション

6) 「グアテマラ、新しい発見」：エル・サルヴァドル、ホンデュラス国境地帯

この地域は、首都からのアクセスが良いにもかかわらず、これまであまり注目を集めてこなかった地域でもある。

- ① 手工芸品製作村：サン・アウグスティン・アカサグアストラン、サカパ
- ② 和平合意の町、黒いキリスト像：エスキプラス
- ③ 温泉：サンタ・ローサ、アジャルサ
- ④ 釣り：アジャルサ
- ⑤ モンテクリスト国立公園（エル・サルヴァドルとホンデュラスにまたがっている）

そのほか、この地域はホンデュラスのコパン遺跡へのアクセスとなっている。

7) 「太平洋海岸」：太平洋沿岸地域

太平洋岸の海は黒砂で波も荒く、湿度も高いため、海浜リゾートとしては向かないとされてきた。しかし、近年、海亀の産卵や自然を求めるヨーロッパ人観光客が訪れるようになってきている。

- ① 海と海岸
- ② 自然保護区：モンテリコ
- ③ 考古学遺跡：オルメカ文明の遺跡、アバホ・タカリク遺跡（オルメカ、マヤ）、ラ・デモクラシア遺跡
- ④ 自然の景観：パカヤ活火山（2,552m）
- ⑤ 海亀の産卵

### 3-6-2 観光資源の現状と評価

グアテマラにおける観光資源は、前述のように、遺跡・文化観光と自然観光の資源に大別されるが、これらの観光資源、特に遺跡・文化遺産に関しては、先の内戦中にはほとんど手がつけられず、発掘された遺跡も放置されたままになっていたことから、多くの文化遺産が戦闘により破壊されたり、盗難にあたりして破損、または消失してしまったことは非常に残念なことであるといわざるを得ない。しかし、1996年の和平合意以降は、ユネスコやB I Dなどの国

際機関、米国の大学やK f W、スペイン政府などの各国ドナーの熱心な支援と協力により、発掘調査や修復が再開されており、ティカル遺跡を中心にペテン県にある多くのマヤ遺跡の存在が確認されて、メキシコからグアテマラ、ベリーズ、ホンデュラスへとつながるマヤの世界「ムンドマヤ」の概要が明らかになりつつある。

その結果、かつては、ティカル遺跡がペテン県におけるほとんど唯一の観光遺跡であったものが、現在ではヤシャ、セイバル、アグアテカなどの遺跡の発掘もK f WやB I Dの支援により進んでおり、観光客のアクセスが改善されてきたことから、まだほとんどの部分が発掘中であるにもかかわらず世界的にも良く知られるようになり、多くの観光客が訪れるようになった。

現在、これらの遺跡公園に関しては、修復をして展示をしているものの、広大な公園であることから、観光客受入れのための施設はまだ不十分で、雨宿りや休憩のための施設や木陰も十分でなく、観光客のためのインフラ施設整備としては不十分である。また、運営予算の不足により遺跡の保護や維持管理のための手当てが十分とはいえず、発掘品のための雨除けや、保護柵などの維持管理十分なされていないため、石灰岩のステラが雨ざらしになっていたり、観光客が手で触れたりつかまって写真を撮ったりしており、発掘品をいためる原因ともなっている。そのため、保護柵と同時に、オリジナルは博物館に保存して、野外の遺跡公園に置くものは順次レプリカと置き換えて行くことが望まれる。

また、サイトインフォメーションからは場所は読み取れるが遺跡の各部分が分かりにくいいため、あまり目立たないデザインによる遺跡の表示があるとよい。この表示板についてはアンティグアの、カサ・サントドミンゴにあるガラスの表示板のデザインは遺跡のなかで目立ちすぎず、必要な人だけに見えるようになっており、良くできている。

文化観光資源としては、スペイン時代の町や建物、マヤ先住民のインディヘナの生活文化と手工芸品がある。スペイン時代の町、アンティグアに関してはユネスコとスペイン政府が町並み保全計画をもっているが、すべての建物がパティオ形式であることから、外壁にはあまり手をつけることがないせいか、町並みの保全は良く行われている。問題は、旧市街に乗り入れてくる自動車で、石畳の道路の陥没が排水管の破壊の原因になっており、雨が降ると道路が冠水してしまうところがある。そのため、中央政府はアンティグア市に対して、ゾーンによる自動車乗り入れ制限を行う許可を出している。

インディヘナの生活文化と工芸品は、グアテマラ独特なもので興味深いものであるが、インディヘナの人々にとって、外国人観光客はまだ手工芸品販売の対象でしかなく、生活文化に直接触れるところまで受け入れる客とは考えていない。これは、ヨーロッパ系グアテマラ人に対しても同様であるとのことで、今後、文化の継承と同時に観光客受入れに関する教育を地域のなかに取り入れていくなどして時間をかけて変化させていく以外ないものと思われる。



工芸品は特に地方で製作されるものは伝統的なものがほとんどで、グアテマラ以外で現代的生活のなかに取り入れていくにはあまりにも地方色が強く、装飾品として以外生活のなかで利用することが難しいものが多い。また、セラミック製品やガラス製品、木の彫刻など、運搬に神経を使うものが多く売られていて、観光客は買うのに躊躇するものがある。近年は輸出を意識して現代生活に取り入れられるデザインも開発中である。

### 3-6-3 観光資源開発の課題

#### 1) 観光プロダクトの多様性を促進する開発

グアテマラの観光は全体的には特定の興味と目的をもつSIT観光客のデスティネーションであるといえる。外国人観光客の活動のほとんどが、遺跡・文化・自然探訪の目的をもった観光客で、レジャー観光とリゾートは、主に、国内又は全体の約35%を占める近隣諸国からの観光客の観光活動となっている。そのため、今後の観光資源開発に関しては、ターゲットの設定を国際観光客と国内及び地域内観光客、SIT観光客と一般観光客とに分けて進め、両者の増加をめざすためにプロダクトの多様性を広げる開発が進められねばならない。

#### 2) 近隣周辺諸国との競合・補完関係をめざした開発

グアテマラ周辺には、メキシコをはじめ、ベリーズ、キューバ、バハマ、コスタ・リカなど、既に世界的に知名度の高い、また魅力あふれる観光地があって、グアテマラの観光は当然ながらそれらの先進観光立国との競合のなかで進められることになる。そのため、グアテマラ独特の資源であるマヤ遺跡<メキシコのものとは多少違う>、マヤ先住民の文化・工芸、カリブ海地域の自然観光など、ほかの地域にはない文化と自然、グアテマラにはない海浜リゾート、音楽、踊り、黒人文化などをツアーに組み合わせることにより、グアテマラ観光プロダクトの魅力をより高めることができる観光商品開発をめざす。

#### 3) 開発の相乗効果を期待するために既存の観光資源とのネットワークを検討する。

観光資源開発の効率性とその相乗効果を期待するために、既存の観光地とのネットワークを考慮しながら開発を進める。ネットワークづくりには、観光資源の性格、ほかとの補完性、インフラ、時間と距離のファクターを含めることにする。

#### 4) 観光の地方化と地方振興、住民参加

現在、ほとんどすべての旅行料金はグアテマラ市とアンティグアにおいて支払われており、地方経済への貢献が少ない。このため、観光産業の地方化により、地方における観光産業を振興し、関連産業の振興と雇用の機会の増大を図る。このことは結果的に地方の経済的水準の向上につながり、地域格差の是正に貢献すると同時に地方の文化の振興をめざす。

このためには、観光収入の地域での経済的、人材的蓄積を作るために、地域の住民自身が観光産業に参加し、住民の総意により、地域の産業として育成して行くことが条件となる。

### 3-7 観光関連産業

#### 3-7-1 ホテル業

ホテルは1999年12月現在、全国で9,872室がI N G U A Tに登録されている。そのうち、グアテマラ市には、5スターホテルは1,468室、4スターホテルは1,010室が集中しており、アンティグアには5スターホテルが295室、4スターホテルは90室あって、これらの2都市で、全国の5スターホテルの96.4%、4スターホテルの67.4%を占めている。主要観光地における星を取得しているホテルの室数を以下の表3-7-1に示す。

**表3-7-1-A 主要観光地における星付きホテル室数(1998)**

| 観光地／県別         | 室数    | 1つ星   | 2つ星   | 3つ星   | 4つ星   | 5つ星   |
|----------------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|
| グアテマラ市         | 3,734 | 161   | 671   | 424   | 1,010 | 1,468 |
| ティカル／ペテン県      | 702   | 169   | 326   | 135   | 0     | 72    |
| ケツェルテナンゴ県      | 612   | 275   | 144   | 118   | 75    | 0     |
| パナハッチェル／ソロラ県   | 605   | 93    | 132   | 214   | 166   | 0     |
| コバン／両ベラパス県     | 223   | 67    | 70    | 86    | 0     | 0     |
| アンティグア／サカテペケス県 | 677   | 118   | 104   | 70    | 90    | 295   |
| イサバル／イサバル県     | 674   | 157   | 160   | 132   | 172   | 53    |
| グアテマラ全体        | 9,872 | 1,839 | 2,331 | 2,182 | 1,632 | 1,828 |

出典：I N G U A T

1996年の国内和平協定締結後のグアテマラは民主的な手続きにより政治的にも安定政権の維持を継続してきたことにより、国際ホテルチェーンの信頼を受け、1999年以降、それら国際ホテルチェーンのグアテマラへの進出が本格化し、2000年7月現在、ホリデイ・インに続き、ハイアット、インターコンチネンタル、ウェスティン、マリオットなどが進出している。

#### 3-7-2 旅行業

ツアーオペレーターは、すべてI N G U A Tの事業許可を受けて登録することになっており、オペレーターの資格に関する法律も制定されている。現在、ツアーオペレーターはグアテマラ全土で約180社あって、そのほとんどがグアテマラ市とアンティグアに集中している。ツアー

オペレーターのなかには、ティカルのように定期的な観光客の入り込みが望める場合には、地方事務所を持ったり、又は地方のランド・オペレーターと契約をしていて、首都からの観光客の受け渡しを行っているものもあるが、もっとも需要の多い日帰りのツアーでは、運転手がガイドを兼ね、観光のすべての業務を行っている場合が多い。そのため、地方における観光収入は食事代とお土産代ぐらいで、地方における観光収益は低く、観光の地方経済への貢献度は低い。最近では、アンティグアが観光客のベースとなりつつあり、アンティグアに本社をおいて、グアテマラ市をはじめ各観光地に観光バスやシャトル便を運行している会社が増えてきている。

ツアーオペレーターは業界の改善と信頼性の向上、また、利益保護のための政府に対するロビー活動を行うことを目的に2000年の1月にASOPTOURと称する協会を設立したが、会員はまだ15社のみで、会員数も少なく、協会としての影響力も小さく、具体的な業界活動はまだあまり行っていないような印象を受けた。このほか、ホテル、お土産業界などすべての観光関連の業界組織CAMUTOURも組織されている。この協会への登録は自由意志で特に義務はない。

観光ガイドは、INGUATの免許により営業することができることになっており、現在、約400名が登録されている。ガイドは、その個人の能力と語学力に応じて、

- ① 特定の観光地のみでのガイドの免許
- ② 地域にある複数の観光地においてガイドができる免許
- ③ 全国の観光地においてガイドができる免許

の3種類の資格がある。ガイドの試験は1年に2回、グアテマラ市のINGUATの本部で歴史、文化、芸術などに関する試験が行われている。ガイドは本来、スペイン語のほかに外国語を1つ以上できることが資格の条件になっているが、上記①に限って、中南米とスペインの観光客を対象とした、スペイン語のみのガイドも多くいる。外国語は英語のほかに、フランス語、イタリア語、ドイツ語を話すものが多い。しかし、日本語は何人かが勉強中とのことであるが、現在のところ日本語のガイドはいない。

### 3-7-3 手工芸品製作・販売

グアテマラにおいては手工芸産業は大きな位置を占めており、首都や観光地での販売のみならず、輸出も積極的に行われており、輸出産業としてのグアテマラの特産品である手工芸品は1999年には1,280万ドルとなった。それら手工芸品の多くは地方における農民のホーム・インダストリーによる地元産品で、なかでも、独特な織物は伝統的にグアテマラの代表的な手工芸品で、国内の農民の約60%が関連している一大産業製品となっており、そのほか薬草などとともに、EUやユネスコによる品質向上と販売への技術協力が行われている。特に、ECは1996年から2000年までの間、手工芸品の品質改善のための技術協力プロジェクトを実施し、そのせ

いで、バッグやセラミック、木彫などにかなり質の良いものができるようになった。ブランド名は「アンティグア」と「グアテマラ」の2種類がある。これらの品物はグアテマラ市内で作成されており、地方への技術移転は今後行うことになっているが、まだ実施はされていない。そのため、地方の観光地で販売されているものは、従来どおりの製作技術と質で、付加価値が高い製品にはなっていない。しかし、観光地におけるそれらの販売は数少ない地元への直接的観光収入源となっており、地方における重要な経済活動としての位置を占めている。今後手工芸品の質と生産性を高めていくために、文化省のなかに「民芸品製作活動支援委員会」が発足し、製作者支援のための社会保障、教育、商業化への資金援助などに関する法整備が検討中である。

### 3-8 観光商品

#### 3-8-1 観光活動

グアテマラ観光における観光活動は特定の目的をもった観光活動が主となっており、いわゆる物見遊山を目的の一般観光活動は少ない。これは、グアテマラの歴史的、文化的性格が非常に強い一方、内戦や政治的不安により、一般観光客を受け入れるだけの投資が行われてこなかったことが原因として考えられる。そのため、現在グアテマラが提供できる主な観光活動は以下のとおりである。

##### 1) マヤ遺跡を訪ねる遺跡観光

グアテマラにおける主要な観光活動の一つで、主にペテン県の北部、ティカルを中心とした地域のマヤ遺跡を訪ねる観光で、そのいくつかはの発掘調査と修復が行われている。多くが熱帯雨林のジャングルに囲まれているために、ティカル、ヤシャ以外の遺跡はアクセスが容易ではない。特殊な遺跡観光では、アティトラン湖に水没したマヤ遺跡を訪ねるダイビング・ツアーもある。

##### 2) スペイン植民地時代の文化を訪ねる歴史・文化観光

グアテマラ市、アンティグア、ケツツェルテナンゴなどに残る植民地時代の建物や町並み、芸術を訪ねる観光で、アンティグアは首都から近いことと、保存状態が良好なことで、もっとも多く観光客が訪れている。アンティグアへの観光客はグアテマラ人が外国人の約3倍となっている。

##### 3) マヤ先住民族の文化を訪ねる人文・文化観光

チチカステナンゴ、ウエウエテナンゴ、ケツツェルテナンゴ、アティトラン湖周辺の先住民、インディヘナの文化と民芸品村などを訪ねる観光で、首都とアンティグアからの日帰り1-2泊のバス旅行での観光がある。

##### 4) 火山、熱帯雨林、動植物を訪ねる自然探求観光

国内にいくつかあって活動が続けている活火山への登山をはじめ、各地にある温泉、中

部から北部にかけての熱帯雨林ジャングルのトレッキング、バードウォッチング、特にケツアルを目的のエコツアーが多い。そのほか珍しい動植物の探求をする観光もある。

#### 5) ラフティング、カヌーなどを楽しむレジャー観光

中部高原地帯での急流を利用したラフティングやカヌーで、主としてグアテマラ市やアンティグアにあるクラブの主宰によっている。したがって短期の観光客の観光活動にはなっていない。カリブ海でのダイビングは、グアテマラ近海は透明度もあまり良くなく、ベリーズには及ばない。

### 3-8-2 観光プログラムと観光商品の現状

グアテマラでの観光商品は上記に述べた観光活動をいくつか組み合わせた観光プログラムに交通と宿泊、入場料、運転手、ガイド、食事などを組み合わせて構成されている。現在グアテマラにおいて販売されているツアー商品の代表的なものは以下のとおりである。

|                |          |           |
|----------------|----------|-----------|
| 1) グアテマラ市内観光半日 | 毎日2回     | \$ 25.00  |
| 2) 博物館ツアー      | 毎日2回     | \$ 32.00  |
| 3) アンティグア半日    | 毎日2回     | \$ 32.00  |
| 4) アンティグア全日    | 毎日       | \$ 40.00  |
| 5) コーヒー園訪問     | 毎日       | \$ 35.00  |
| 6) チチカステナンゴ    | 日曜・木曜    | \$ 48.00  |
| 7) アティトラン湖全日   | 毎日       | \$ 65.00  |
| 8) ティカル日帰り     | 毎日       | \$ 185.00 |
| 9) ティカル2日、(バス) | リクエストによる |           |
| 10) コパン遺跡全日    | 毎日       | \$ 175.00 |

このほか、上記ツアーの他にも、ペテン県の奥地の遺跡を含めて2泊から4泊ぐらいのペースで観光する旅行商品も売り出されている。また、今後開発されるものと思われるツアー商品では、グアテマラ国鉄が主催する「観光SL列車」があり、1か月に一度ぐらいのペースで運行する計画がある。

### 3-8-3 観光商品開発の課題

これまでの観光資源、観光商品開発に関する考察により、現在の観光の状況を分析すると、観光商品の開発のうえで、インフラの向上、治安の改善、近隣周辺国との協調が重要であると思われる。

#### 1) インフラ整備の向上

グアテマラ観光のうえで、インフラ整備、特に交通インフラは観光商品の多様性の拡大

と質の向上のための重要な要因となる。目的地まで、安く、早く容易に到着できることは、観光地での活動の自由度が向上し、旅行商品の付加価値を高めると同時に運行経費が縮小し、オペレーターの利益率の向上につながる。鉄道があまり発達しておらず、道路交通が主な観光運輸手段となっているグアテマラでは、現在の長距離バスの平均運行速度、40km前後を車両と道路の質の改善の改善によりあげることは観光商品の質的改善にとって不可欠となる。

## 2) 治安の改善

グアテマラでの社会問題の一つが治安の問題であろう。警察官のパトロールの強化、などの努力により、以前よりは改善したともいわれているが、それでも、まだ一部の地域では、犯罪の発生がしばしば報告されている。警察当局からの犯罪データは入手できなかったが、報告されている件数よりも実際の数をはるかに多いといわれている。都市部での犯罪や観光客をねらった犯罪は単なる貧困のみが原因ではなく、内戦中に定着した武器による「力の支配」を肯定する概念が残っていることにもよるものと思われる。内戦中に定着した「力の支配」を肯定する概念を捨て去り、「法の支配」を受け入れるまでにはまだ時間が必要であると思われる。

現在、ツーリスト・ポリスの設置は予算的に無理であるとのことであったが、民間のツアーオペレーターのなかには観光客保護のために警察官に警備を依頼しているところもあった。警察当局は、治安の向上のために交番システムを導入するための法案を提出中で、現在検討が行われ、議会で審議中であるとのことであった。

## 3) 近隣周辺国との協調

前述のように、現在、グアテマラで販売されている旅行商品は類似のものが多く、各オペレーターはその多様性を持たせるために苦労しているのが現状であるが、近隣諸国との強調により、お互いに旅行商品の幅を広げる努力をすべきであると考え。例えば、間や遺跡を豊かにもつが海浜リゾートの可能性の少ないグアテマラと、海浜リゾートの可能性は豊かであるが、遺跡も少なく、文化観光資源の少ないベリーズとの協調により、両国の観光商品の幅は大きく広がることになる。特に、中米は狭い国土と少ない人口からなる国家が多いことから、航空会社同様、観光商品開発においても地域的な協力関係を築きあげることが望ましい。

# 3-9 観光市場・需要動向

## 3-9-1 観光市場の現状と需要動向

1998年における、グアテマラ観光の主要市場は、カナダ、メキシコを含む北米で、全体の39.3%を占めており、続いて、近隣の中米諸国34.5%、17.7%、そのほか、18.5%で、北米とヨー

ロッパが主要な観光客市場となっている。(中米近隣諸国からは友人訪問、就労が多い)1995年から1999年までの入国者の国籍別データはANNEX-1に示す。

### 3-9-2 中米・カリブ海地域におけるグアテマラ観光の位置づけ

グアテマラの観光は中米全体にわたる、メキシコのユカタン半島とともに、マヤ文化の中心的位置を占めており、ペテン県北部には新たにマヤ遺跡の発見が続いている。グアテマラ領内の遺跡は、周辺のベリーズはホンデュラスよりも多く、内戦の影響で発掘が遅れ、まだ調査の手の入っていない遺跡が多いにもかかわらず、このことが、中米、カリブ海地域の観光地のなかでのグアテマラの特徴となっており、考古学に関心のある特定層の観光客の集客能力には強い魅力をもっている。そのため、今後の観光開発と魅力作りも周辺の国々と異なった方向に勧められることになる。また、マヤ先住民であるインディヘナの生活文化や手工芸品もほかでは見られない文化であり、遺跡観光、文化観光、エコ・ツーリズムが周辺国の観光地とは異なる主要な観光プロダクトとして独自の市場を開拓していくことに成るものと考えられる。

しかし一方では、より範囲の広い一般観光客の集客のためには、グアテマラは海岸や透明な海水などのリゾート資源が少ないうえに未開発で、メキシコのカンクン、バハマやベリーズには遠く及ばないことから、それらの国の海浜リゾートとの組み合わせのなかで、遺跡・文化観光とエコ・ツーリズムを発展させていくことが好ましいものと思われる。

### 3-9-3 観光市場開発の課題

上記に述べたように、グアテマラは近隣諸国の観光のなかで、遺跡・文化観光とエコ・ツーリズムを分担していくことが、観光資源と開発の可能性として好ましいが、経済的には観光客のベースとなるリゾート地の方により多くの収益がかたよることになるため、観光商品開発に際しては、グアテマラでの収益向上の方法とそのための協力システムを検討する必要がある

## 3-10 人材育成

### 3-10-1 観光産業従業者

グアテマラにおいては、観光産業従事者にしては関してはそれぞれの企業が独自に雇用、解雇を行っているために、その全体の数を把握しているところはいないが、INGUATに登録されている関連企業、そのほか、協会等リストなどをもとに直接雇用を推定すると、ホテルには25,000人、ツアーオペレーターとエージェントに3,500人、ガイド400人、工芸品製作職人5,000人、そのほかを加えると35,000人以上が観光による雇用を支えていることになる。これに、工芸品販売店やストールの店員、さらに、全国の60%の農家に関連しているといわれる織物のホーム・インダストリーと観光地での露天商等を含めると、観光産業は膨大な数の従業者

を抱えるグアテマラの一大産業である。

### 3－10－2 人材開発・育成

観光関連産業の人材教育には、Universidad del Valle de Guatemala、Universidad Rafael Landivar、Universidad ISTMOなどの大学に観光学科やホテル科が置かれているほか、教育省管轄下にある公立と私立の職業学校がグアテマラをはじめ、地方にも置かれていて、観光産業のための人材育成を担っている。そのほか、教育省管轄下の観光関連の職業学校が、1995年には全国で9校、学生数も769人であったものが、1998年には25校で1,476人、1999年には、42校に増えて、学生数も2,186人へと著しい増加をしている。その地域の内訳は、グアテマラ市に16校、イサバルに5校、アンティグアとケツツェルテナンゴにそれぞれ4校、そのほか11校となっている。

また、手工芸品製作については多くの徒弟制度により支えられており、全国の名人の元で個人的指導を受けながら修行に励んでいるが、その全体数は不明である。

ホテルの現場においては、4つ星以上のホテルには企業内研修制度があり、その人の地位や研修目的に応じて、グアテマラの大学やアメリカ、スイスなどのホテル学校、シンガポールにあるグループホテル等で研修を行うプログラムをもっている。

### 3－10－3 人材開発の課題

観光産業従業者の人材に関して、ホテルとツアーオペレーターの間では、熟練した人材の不足が問題とされている。特に、首都と地方にホテルをもつチェーンホテルにおいては、首都のホテルに関してはあまり大きな問題とはならないが、地方におけるチェーンホテルには従業員がいきたがらず、地方転勤を強要すると転職してしまうため、良い人材が地方に定着せず、人材に関する問題は常に存在している。そのために、熟練を要するセクションにはエル・サルバドル人やホンデュラス人などの外国人スタッフが多く働いている。

ホテル協会におけるヒアリングのなかで、グアテマラ人は非常にフレンドリーでホスピタリティにあふれているために、職業的素質としてはホテル業に向いているが、全体的な教育水準が低く、仕事を理解させるのが大変手間がかかること、また、大学を出たとたんに高い地位を要求するものが多くて、つらい仕事をしながらない傾向があるとの指摘があった。



## 第4章 本格調査への提言

### 4-1 調査項目とその内容・範囲

#### 4-1-1 現状分析

グアテマラ観光の現状分析については、以下の点に留意して調査を進めることが肝要である。

- 1) 中米・カリブ海地域諸国におけるグアテマラ観光の位置づけの分析とそれら諸国の観光地との競合・補完関係に着目した開発計画の策定。
- 2) コーヒーに次ぐ安定した外貨獲得のための産業開発としての観光開発計画。
- 3) 地域格差是正をめざす地方振興のための観光開発計画。
- 4) 地域住民参加による社会経済開発と内戦後の国民の和解。
- 5) 現在、各観光地において進行中の既存の開発計画及び調査との整合性。広域計画では、ムンド・マヤ開発計画、地域の計画では、B I D、ユネスコ、G T Z／K f W、Cooperacion Española、など、国際機関とドナーが実施中のプロジェクト、F I Sによる地方経済社会基盤整備プロジェクトなど、それらの調査及び計画との整合性。
- 6) 人的資源開発を含む開発計画策定。特に地方における職業技術普及による地方振興と経済的効果の促進。

#### 4-1-2 市場調査及び需要予測

- 1) 市場調査に関しては、観光客発生市場となる北米、中米近隣諸国、南米、欧州などにおけるグアテマラ観光に関する市場調査を、エアラインとグ国内のオペレーターとエージェントにおいて実施する。特に、グアテマラにおいては、マヤ遺跡と自然観光を目的とした個人旅行者が多いことから、それらのツアーを実施しているグアテマラ市、とアンティグアにおける調査が必要とされる。
- 2) また、近年、グアテマラ市ではなく、アンティグアをベースとする観光客が増加しており、アンティグアを出発点とするツアーが増えていることから、アンティグアにおける調査が不可欠とされる。
- 3) 需要予測に関しては、①W T Oによる世界全体の観光客発生数と②地域への入り込み観光客数の予測、③市場発生国と地域の経済成長予測など、需要側条件からの予測のみならず、④空港の移転も含めた改良計画、⑤ホテルのプロジェクト、⑥観光地への入り込み可能観光客数、⑦環境負荷による許容量の予測など、供給側の条件も含めた予測を検討する必要がある。

#### 4-1-3 観光資源とその評価

- 1) グアテマラの観光資源は、①マヤ遺跡とインディオの生活文化と工芸を中心とする文化観光資源のほかに、②自然、動植物の生態を求める自然観光資源、③植民地時代の歴史を求める歴史観光資源がある。いずれも特定の興味をもつ観光客(SIT)を対象とした観光資源となっていることが特徴である。特に、遺跡と歴史観光資源に関しては、近年になって発見されているものやいまだ全く未開発なものも多く、今後、2020年を目標とした長期的視野に立った観光資源開発の可能性と評価が望まれる。

#### 4-1-4 環境保全と持続可能な観光開発

グアテマラの持続可能な観光開発に対して環境保全という観点から分析する内容は、スクーリングの結果より少なくとも環境項目における社会環境では経済活動、交通・生活施設、遺跡・文化財、水利権・入会権、自然環境では土壌浸食、動植物、景観、公害では水質汚濁が中心になり、IEEあるいはEIAの重点項目になると思われる。

本格調査における観光開発計画は、グアテマラの実情及び観光資源を配慮すれば、エコ・ツーリズム計画もその一つにあげられる。エコ・ツーリズムとは「動植物などの自然資源に恵まれた地域で自然環境との共存を図りながら、自然観察に行ったり、先住民の生活や歴史を学んだりする旅」のことである。

したがって、その計画は開発するという意識ではなく、環境を保全するという意識をもって関連する地域の生活や文化に影響をできるだけ与えず、しかも地域に経済的な効果をもたらす内容でなければならない。エコ・ツーリズムの概念についてはまだ議論が絶えないのが実情であるがエコ・ツーリズムの二面性(①新しいエコ・ツーリズムの提供、②既存のエコ・ツーリズムの制限)を認識した持続可能な計画を策定する必要がある。

また、エコ・ツーリズムを成立させるための要件は以下のように考えられており、それを踏まえた環境保全の内容を検討する必要がある。

- (1) 観光施設の存在
- (2) 地域購買施設の存在
- (3) 飲料用など水の存在
- (4) 動力としてのエネルギーの存在
- (5) 排泄物、廃棄物処理システムの存在
- (6) エコ・ツーリズム専用ガイドの存在
- (7) 地域住民によるエコ・ツーリズム収益管理システムの存在
- (8) 地域住民に対する上記人材教育システムの存在

特に、地域の環境容量を踏まえた関連施設規模、観光者数などに対する制限すべき数量を十分把握する必要がある。

#### 4－1－5 観光開発のポテンシャル評価及び制約条件の調査

- 1) 開発ポテンシャルの評価に関しては、上記で実施した需要予測、観光資源の評価のに基づき、①開発の可能性、②市場における競争力、③弱点、④制約条件の4つの面から物理的条件と社会的条件との分析を行い、それらを総合的に判断した評価とする。

#### 4－1－6 開発優先地区と観光開発プロジェクトの選定

- 1) 開発優先地区と開発プロジェクトは、政府の開発方針である「観光開発は、基本的に民間主導とし、政府はその支援を行う」との政策に沿ってプロジェクトの選定を行う。(インフラと法整備、支援策などを主とする)そのため、民間側の分担の大きなプロジェクトについては、政府の支援方策についての検討を含めるものとする。

#### 4－1－7 補足自然及び環境現況調査

本格調査においては、以下の内容の補足自然及び環境現況調査が必要である。

##### 1. 自然調査

- (1) 地形
- (2) 土地利用
- (3) 気象
- (4) 洪水等自然災害

##### 2. 環境現況調査

- (1) 社会環境
  - ・ 先住民族居住分布／人口／雇用内容／所得
  - ・ 道路／交通網
  - ・ 遺跡・文化財
  - ・ 水利権
- (2) 自然環境
  - ・ 土壌浸食と植林
  - ・ 植物(陸上／水生植物分布と貴重種)
  - ・ 動物(哺乳類、鳥類、爬虫類、魚類、昆虫类等生息種と貴重種)
  - ・ 景観(特殊な景観の存在、野外レクリエーション地の状況など)

(3) 公害

- ・ 水質汚濁（主要河川・湖沼の水質汚濁状況）

3. その他調査

- (1) 環境に対する戦略／政策
- (2) 環境法／環境影響評価法令と事例調査（特に観光開発）
- (3) ほかの国際機関の援助動向（特に環境保全）

4－1－8 全国観光開発計画の策定

1) 観光開発基本政策・戦略の策定

全国観光開発方針・政策、重点開発項目、開発目標などを設定する。グアテマラでは文化遺跡観光及びエコ・ツーリズムなどを推進していこうという意向がある。これらを踏まえ、観光開発に係る基本戦略を策定することとする。

2) 全国観光開発マスタープランの策定（2020年目標）

先に策定した基本戦略に基づき、全国観光開発に係るマスタープランを策定する。なお、マスタープランの策定を通じて優先地域を選定することとなるが、現段階では、ペテン地域、コバンとその周辺地域、ケッツェルテナンゴとその周辺地域の3地域が重要であるとされている。このため、全国マスタープランの策定にあたっては、この3地域を優先地域として想定する必要がある。

4－1－9 地域観光開発計画の策定（2020年目標）

- 1) 全国マスタープランの策定を通じて、優先観光開発地域を選定する。なお、選定は「ペテン（ペテン県全域）」「コバンとその周辺」「ケッツェルテナンゴとその周辺」を基本とし、全国マスタープランの策定を通じて、特段の新規発見などがあった場合は、ほかの地域と入れ替えることとする。「その周辺」の設定については、この段階で提案することとする。またこれらについては、先方の意向を十分に聞く必要がある。

2) 先住民への配慮

グアテマラには多数の先住民が生活している。計画の策定にあたっては、先住民への配慮を十分に行うこととし、先住民が観光開発を通して観光産業に寄与できる具体的な方策とその実行計画を提言する必要がある。

### 3) 優先プロジェクトの選定とフィージビリティスタディ（目標年次 2010 年）

地域マスタープランの策定を通じて、優先プロジェクトの選定を行い、フィージビリティスタディを実施する。

## 4-2 本格調査の分野構成

事前調査の結果から必要となる本格調査団の分野構成は以下のとおりが望ましい。

- 1) 総括
- 2) 観光開発計画(1)
- 3) 観光開発計画(2)(ペテン)
- 4) 観光資源評価
- 5) 観光行政／法律／組織
- 6) 観光振興・宣伝
- 7) 人文観光資源
- 8) 財政／財務分析／経済分析
- 9) 市場調査／需要予測
- 10) 観光関連施設
- 11) 関連インフラ／積算／施工
- 12) 自然条件／自然環境
- 13) 社会環境／先住民配慮／地域開発

## 4-3 調査実施上の留意事項

観光はグアテマラの重要産業で、経済的貢献も大きな産業であるといえるが、産業自体に地域的、社会的偏重が著しい。特に、前述のように、先住民にとっては、観光は観光客に民芸品を販売する対象でしかなく、自分たちも観光産業への参加をめざしてはいない。そのため、今後、観光産業を社会のなかの地元産業として育成していくためには、調査に対しても住民の参加と地域の民意を集めていくための機会をもつことが望ましい。

また、「観光開発」と「環境」という問題については、グアテマラでは自然資源を売り物にしている以上その資源を破壊するような計画は考えられないという基本的な姿勢をとっているが、現地踏査でみられたように観光開発以外のところで既に環境破壊が発生していることも認識する必要がある。

例えば、Quetzaltenango では農業開発（ジャガイモなど野菜畑）や燃料（マキ）供給に対する森林伐採による自然破壊、また Atitlan 湖では生活排水による水質汚濁などが顕著であること。

さらに、本年 12 月ごろに環境省を設置するため、必要な法令等を現在国会で審議中である。

環境関連の主要機関であるCONAMA、CONAP、INABのうちCONAMAが環境省に昇格することになっている。このことは上記3機関及びSEGEPLANで確認している。したがって、本格調査実施においては環境省の存在を配慮する必要がある。また、環境影響評価の法令は1998年に制定され日が浅いため、その内容について十分な理解がされているかどうか協議する必要がある。

本格調査ではその調査内容の性格上、グアテマラ全土の主要な観光地及び潜在的な観光地の現地踏査（メキシコ国境にある未発掘地 Mirador [Tikal を凌ぐ遺跡群] を含む）を行う必要があるが、その踏査実施においてはINGUAT、CONAMA（又は環境省）等と十分調整のうえ、計画的な踏査スケジュールを作成する必要がある